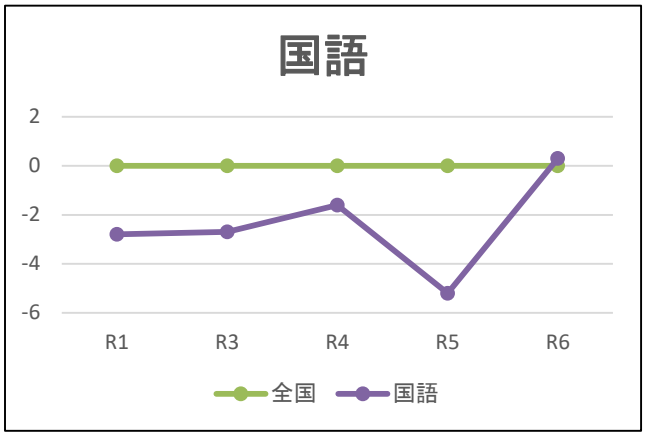
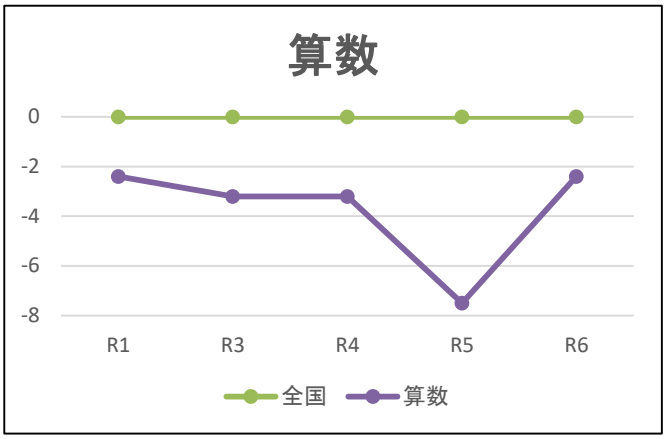
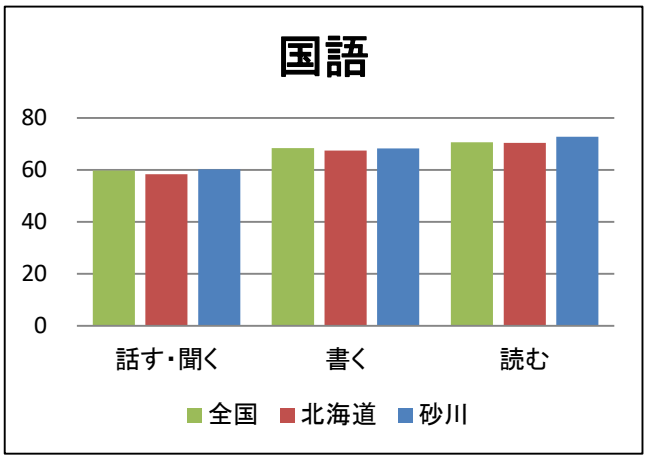
小学校（学校数：５校　児童数：93名）

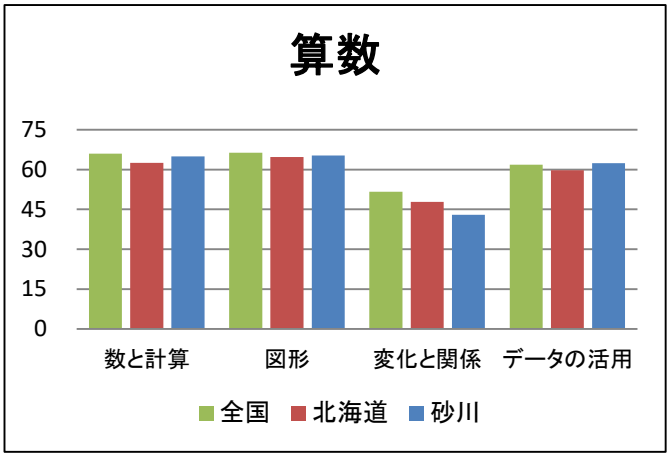
１　平均正答率（全体）の経年推移





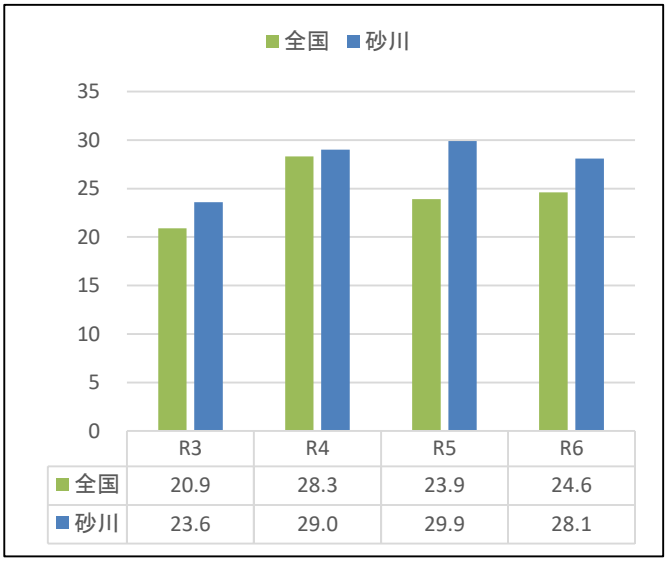
２　領域別平均正答率の状況





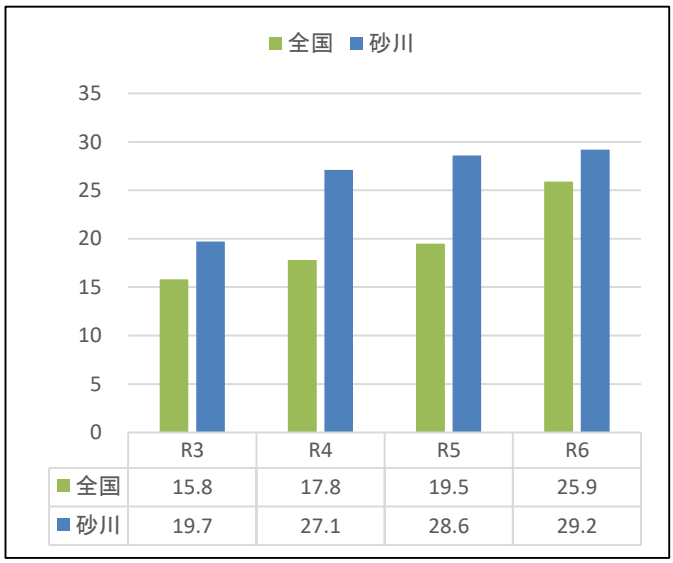
３　全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合（努力を要する児童の割合）

国語



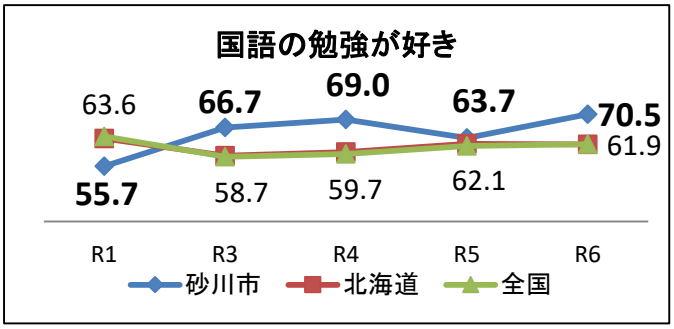
	R3	R4	R5	R6
全国	20.9	28.3	23.9	24.6
砂川	23.6	29.0	29.9	28.1

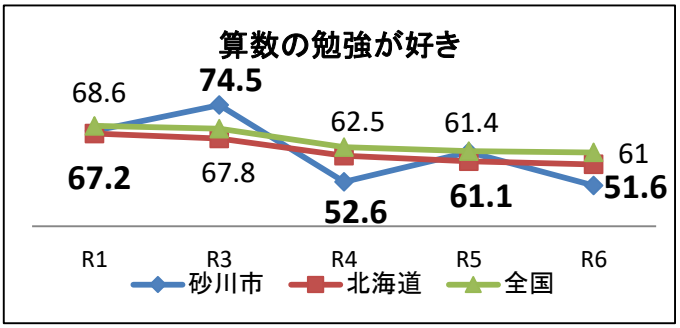
算数

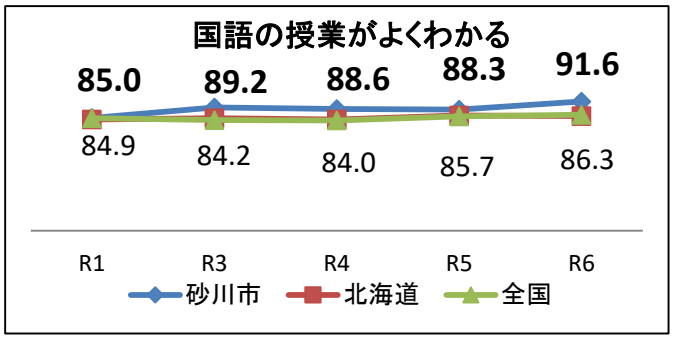


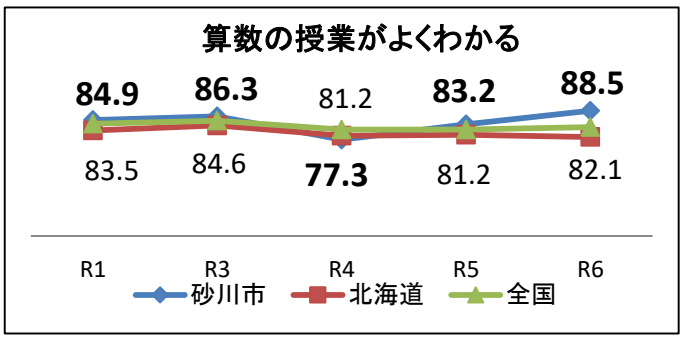
	R3	R4	R5	R6
全国	15.8	17.8	19.5	25.9
砂川	19.7	27.1	28.6	29.2

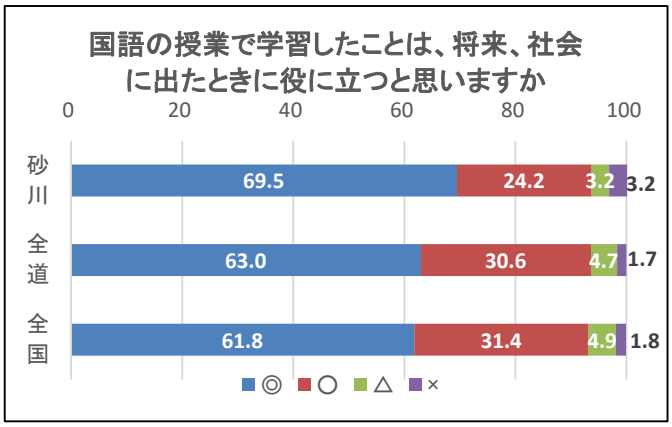
4　授業に関する意識（質問紙調査より）　※北海道の結果については、折れ線グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

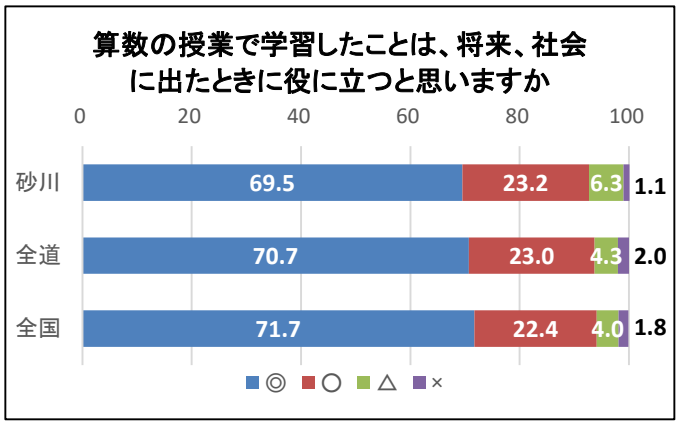












5　分析

○　国語は全国平均と同程度【上】、算数は全国平均をやや下回っている。

○　領域別の全国平均との比較では、国語については、「読む」はやや上回り、「話す・聞く」「書く」は同程度、算数については、「数と計算」「図形」はやや下回り、「変化と数量」は下回り、「データの活用」は同程度となっている。

○　全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童（努力を要する児童）の割合は、国語、算数ともに全国平均を上回っているものの、昨年度比で全国の割合との差は縮まっている。

○　国語の勉強が「好き」、という割合は全国平均を上回ったものの、算数についてはも全国平均を下回った。特に算数科において、児童に学びを通した達成感や成就感、新たな興味を抱かせる指導の工夫が求められる。

○　国語、算数の勉強が「よくわかる」、という割合は全国平均を上回っており、各学校において、「砂川市学習スタンダード」を踏まえた指導や、タブレット端末の効果的活用といった授業改善に取り組んできた成果と考えられる。

○　「学習したことは、社会に出た時に役立つ」と思っている割合は、国語は全国平均と同程度、算数は全国平均をやや下回っているものの、教科の有用性についての児童の実感は高い。

6　授業改善の視点

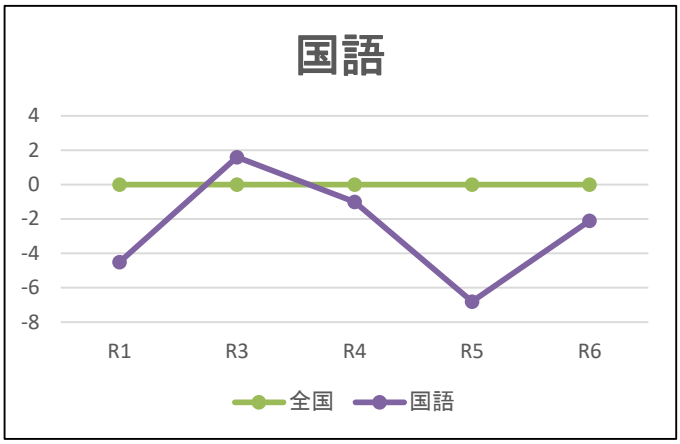
○　砂川市小学校学習スタンダードを踏まえた指導過程による授業改善の推進（課題把握、見通し、自力解決、交流、まとめ、ふり返り）

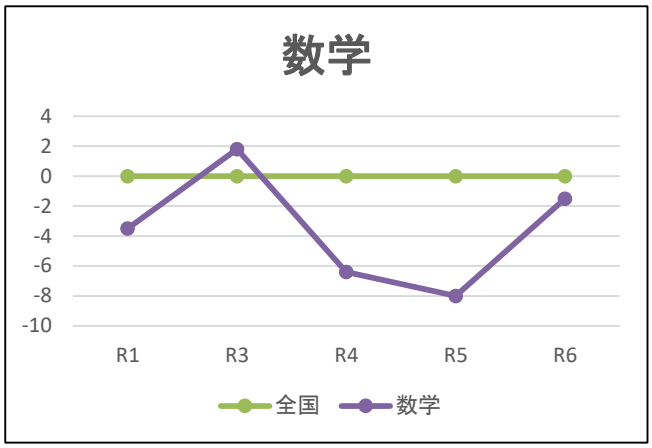
○　児童が思考したり、話し合ったり、交流したりする場面を意図的・計画的に取り入れ、十分な時間を確保した指導の工夫。（教師の端的な説明・指示、子どもの思考を深める発問の工夫、「協働的な学び」の充実など）

○　図やグラフ、表などから読み取ったり、複数の資料を比較・検討する学習場面の設定。

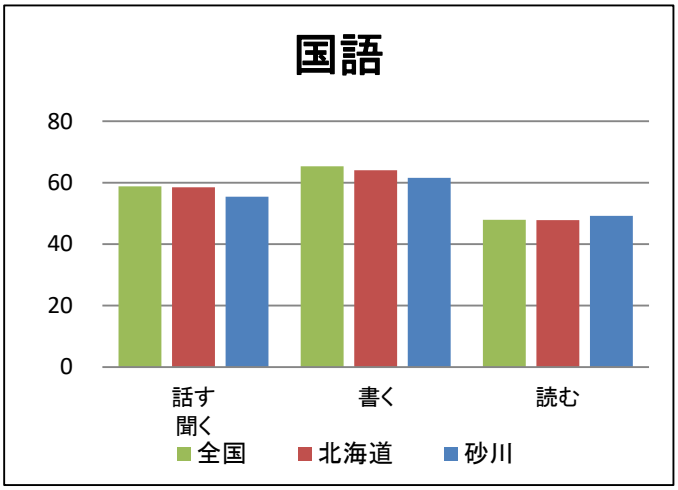
中学校（学校数：１校　生徒数：95名）

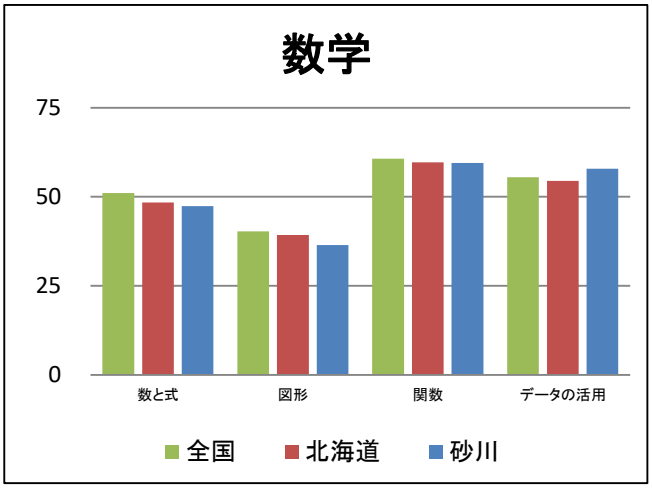
１　平均正答率（全体）の経年推移





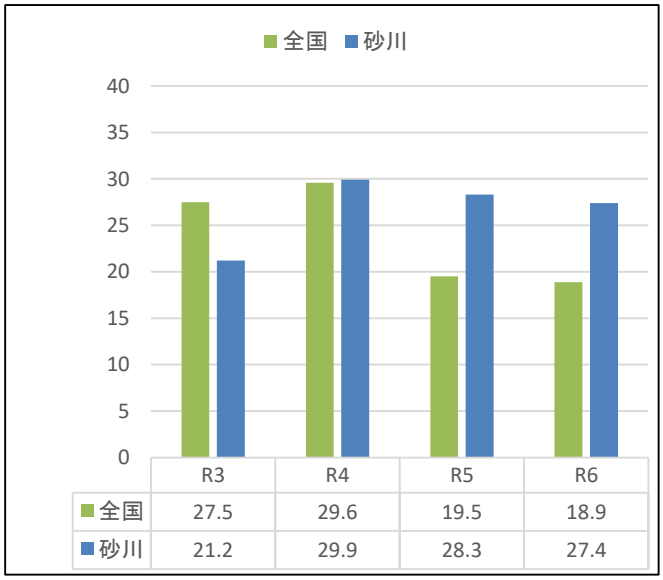
２　領域別平均正答率の状況





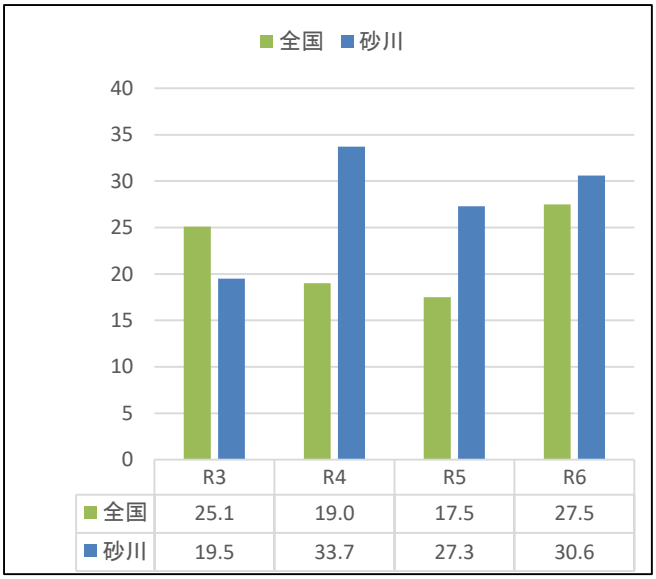
３　全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒の割合（努力を要する生徒の割合）

国語



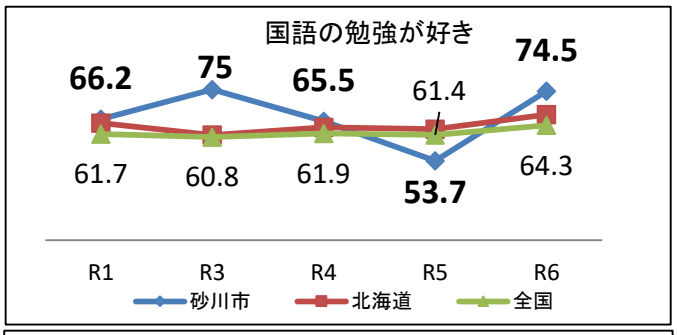
	R3	R4	R5	R6
全国	27.5	29.6	19.5	18.9
砂川	21.2	29.9	28.3	27.4

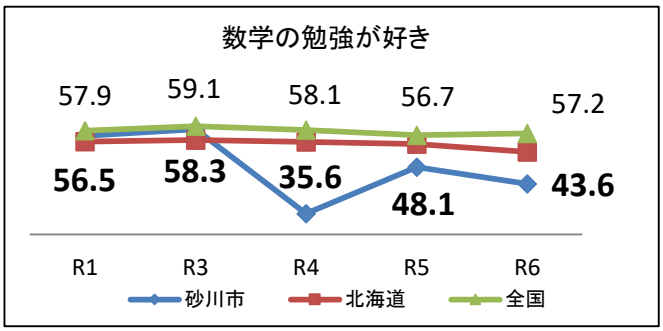
数学

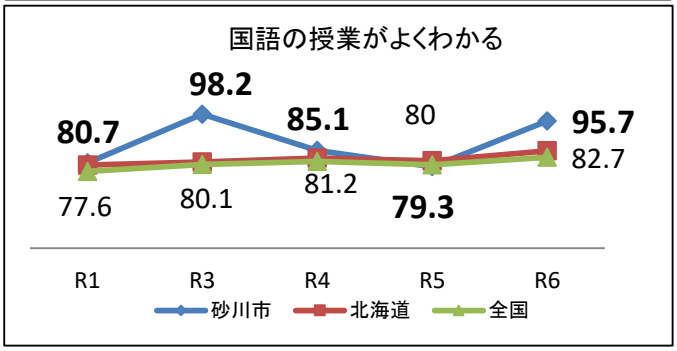


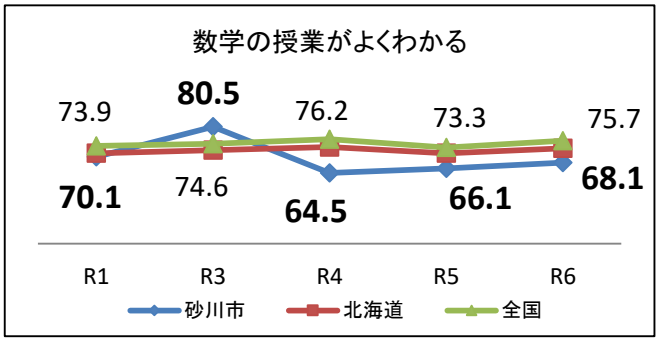
	R3	R4	R5	R6
全国	25.1	19.0	17.5	27.5
砂川	19.5	33.7	27.3	30.6

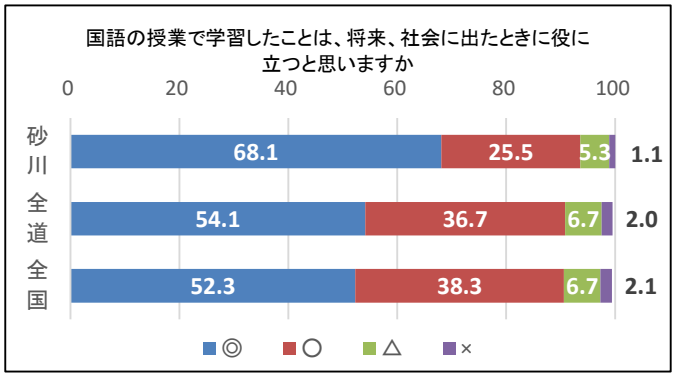
4　授業に関する意識（質問紙調査より）　※北海道の結果については、折れ線グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

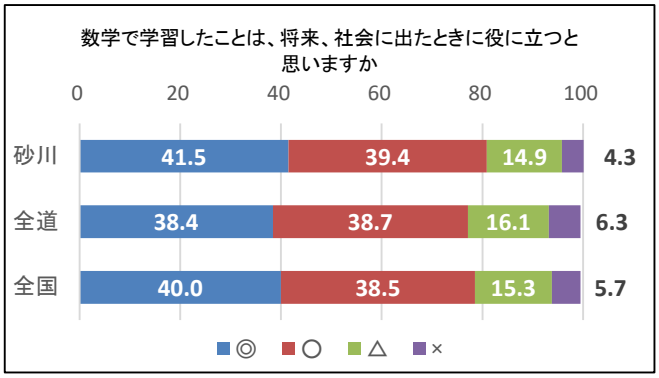












5　分析

○　国語、数学ともに全国平均をやや下回っている。

○　領域別の全国平均との比較では、国語は「話す・聞く」「書く」でやや下回り、「読む」はやや上回っている。数学は「データの活用」でやや上回り、その他の領域はやや下回っている。

○　全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる生徒（努力を要する生徒）の割合は、いずれの教科も全国平均を上回っているものの、数学については全国平均との差が大きく縮まった。

○　「勉強が好き」という割合は、国語で大幅な上昇が見られたものの、数学については数値を下げ、全国平均との差が広がった。

○　「授業がよくわかる」という思っている割合は、国語・数学ともに上昇が見られ、国語は全国平均を上回った。

○　「学習したことは、社会に出た時に役立つ」と思っている割合は、国語・数学ともに全国平均をやや上回っている。

6　授業改善の視点

○　生徒が思考したり、話し合ったり、交流したりする場面を意図的・計画的に取り入れ、十分な時間を確保した指導の工夫。（教師の端的な説明・指示、子どもの思考を深める発問の工夫、「協働的な学び」の充実など）

○　課題解決への見通しをもたせ、終末時には課題解決が図られた実感をもたせるような授業づくりの推進。（「わかる・できる授業」の構築）

○　「表現する」（書く、説明する、思考ツールによって表すなど）ことを重視した学習指導の充実。

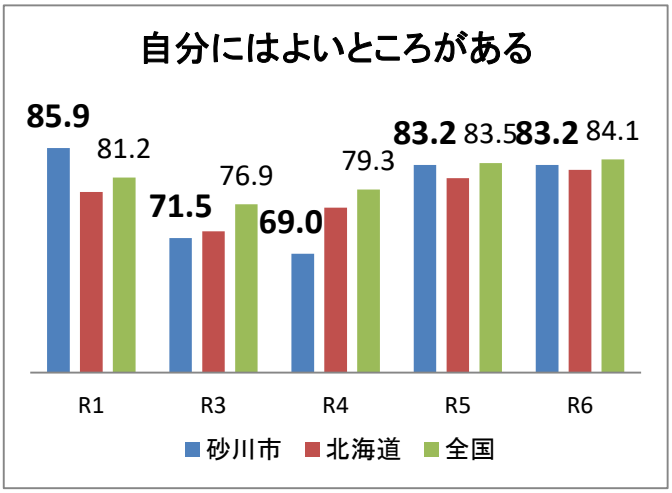
○　小学校と指導過程を統一した「砂川市学習スタンダード」を踏まえた授業改善の推進。

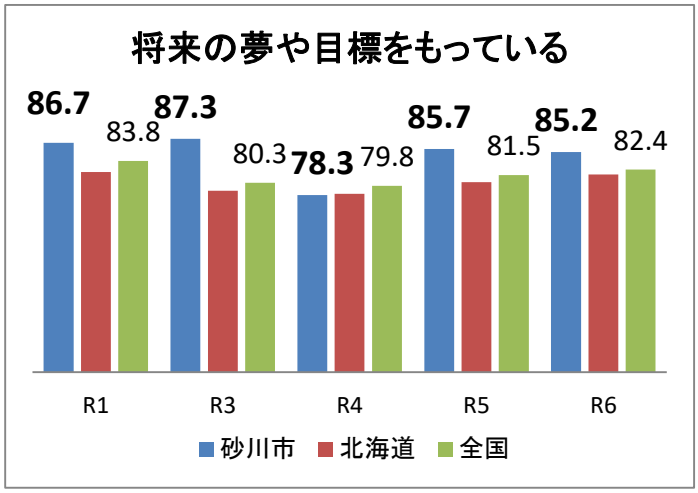
○　学習過程や思考の流れを示す板書を工夫するなど、1時間の授業を振り返ることのできる板書計画の改善。

小学校質問紙調査（学校数：５校　児童数：93名）

※北海道の結果については、グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

1　自尊感情に関する児童の状況

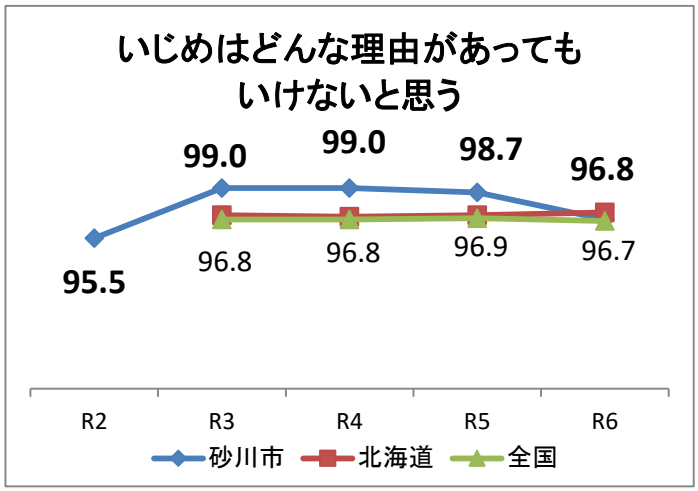


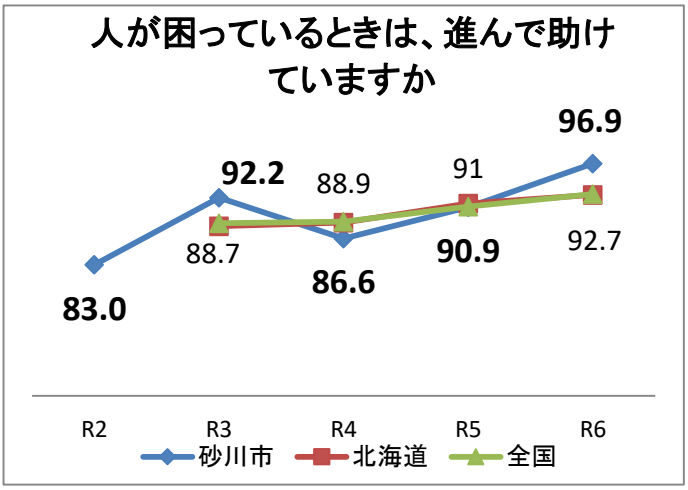


「自分にはよいところがある」と回答している児童の割合は、昨年度と同様の数値であり、全国平均と同程度の状況であった。学校や家庭、地域の中で生徒が自らの有能感や有用感を高めていることの証左と考えられる。引き続き、異学年を含む多様な他者との関わりや体験的な活動を通して、自分のよさに気付いたり、よさを実感したりすることから、自らに自信をもたせる教育活動を充実させていくことが大切であると考える。

「将来の夢や希望をもっている」と回答している児童の割合も、昨年度とほぼ同様の数値となり、全国平均をやや上回っている。外部人材を積極的に活用した学びや、今年度から市内統一版としてリニューアルしたキャリアパスポートの効果的な活用などを通して、小学校の早い段階からのキャリア教育の一層の充実を図っていく必要がある。

2　規範意識に関する児童の状況



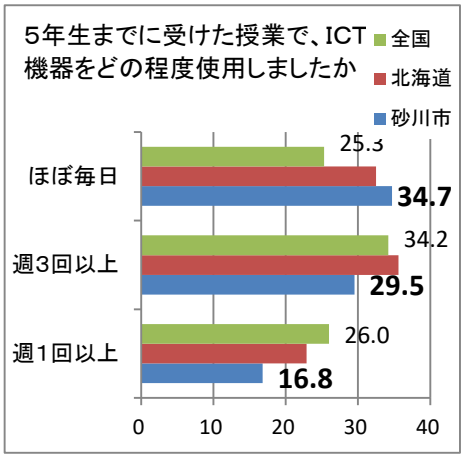


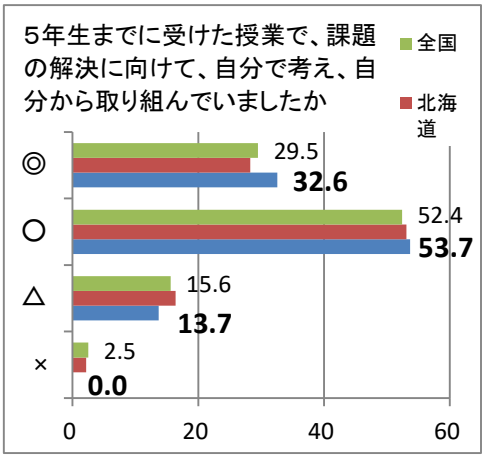
いじめに対する考え方は高い水準で安定しており、相手を傷つけたり、嫌な思いにさせたりしてはいけないということを理解している児童が多いといえる。今後も、全ての児童がいじめはどんな理由があっても許されない行為であり、お互いに嫌な思いをすることなく生活していくことができるよう、様々な場面を通して指導していくことが大切である。

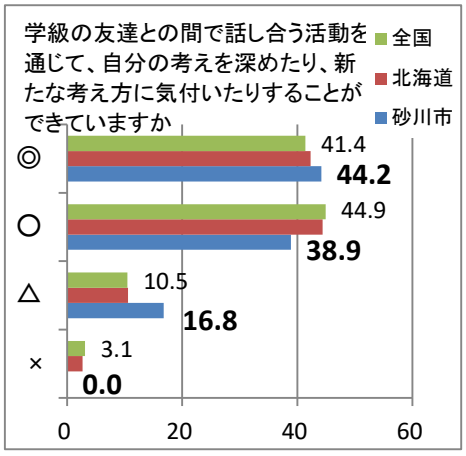
また、困っている人を助けることの大切さを意識している児童の割合は昨年度よりも大幅に上昇し、全国平均を上回る状況であった。他者を思いやる優しい心をもっていることが本市の児童の魅力であることを改めて児童自身、保護者、地域住民と共有しながら、引き続き、児童のよさを伸ばすような指導・支援を行っていくことが重要と考える。

３ 学習に関する児童の状況

（1） ICT機器の活用と主体的、対話的で深い学びの実現

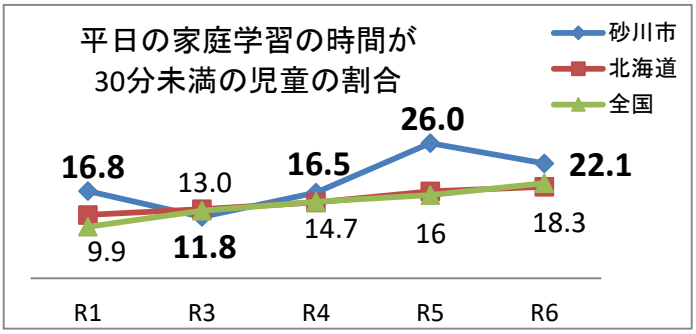


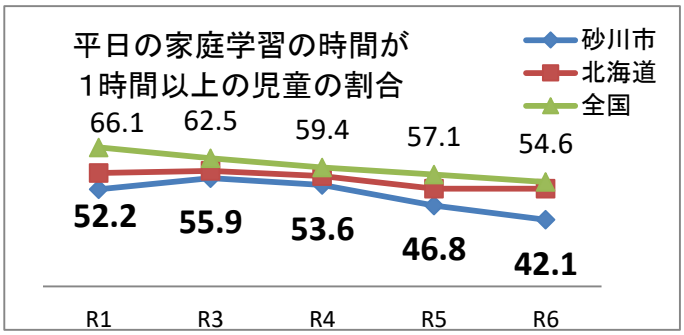


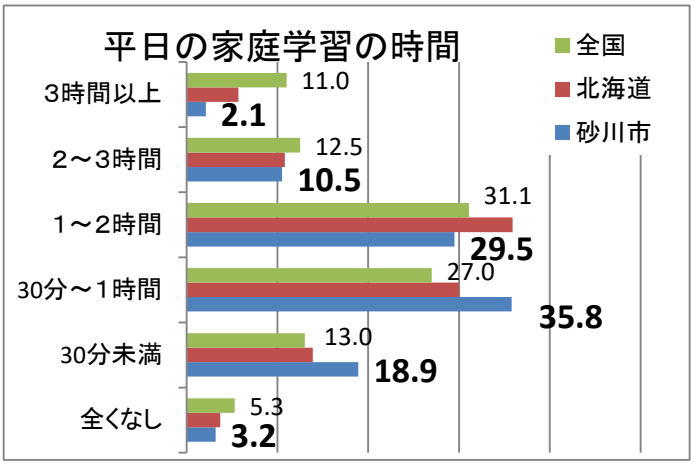


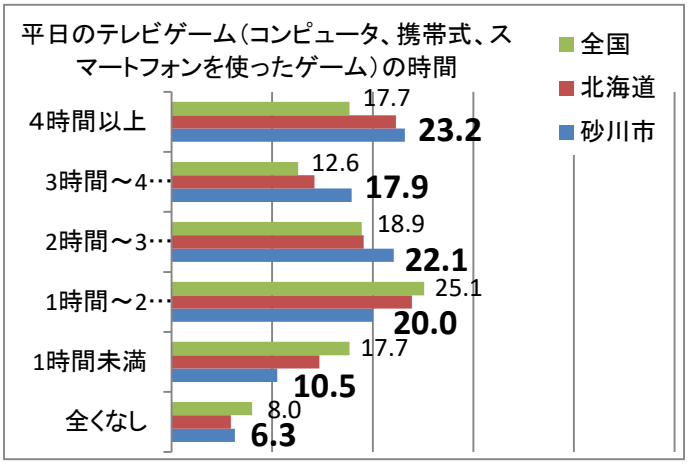
ICT機器を「ほぼ毎日」」活用している割合は、全国平均を上回っており、デジタル機器を積極的に学習活動等に取り入れていることがわかる。また、主体的に課題解決に向かう意識も全国平均を上回っており、課題解決の見通しをもたせる指導の充実や、個人思考を促す場面を設定した学習を推進してきた成果と考えられる。一方、話し合い活動を通して考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていると回答した児童については、やや二極化が見られており、全ての子どもが協働的に学び合うことができるような授業設定の工夫が求められる。

（2） 家庭での学習状況









学習時間の質問からは、平日30分以下の学習時間の児童の割合が減少し、全国平均との差が縮まった一方、平日１時間以上学習している児童の割合は昨年度よりも低下した。平日の家庭学習の時間別の数値では、30分～１時間未満の割合が最も多く、家庭学習に充てる時間が少ない児童が多いという傾向が見られる。

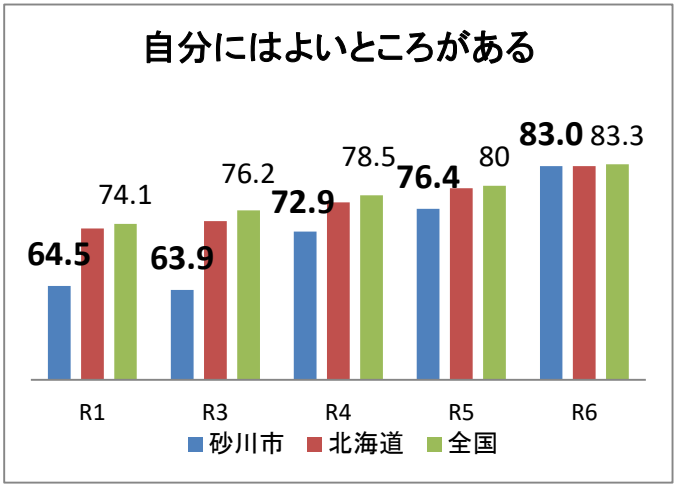
また、平日のテレビゲームの時間を見ると、４時間以上で5.5%、３時間～４時間未満で5.3%全国平均を上回っており、平日、家庭で過ごす時間の多くをゲームに充てている実情が浮かび上がっている。

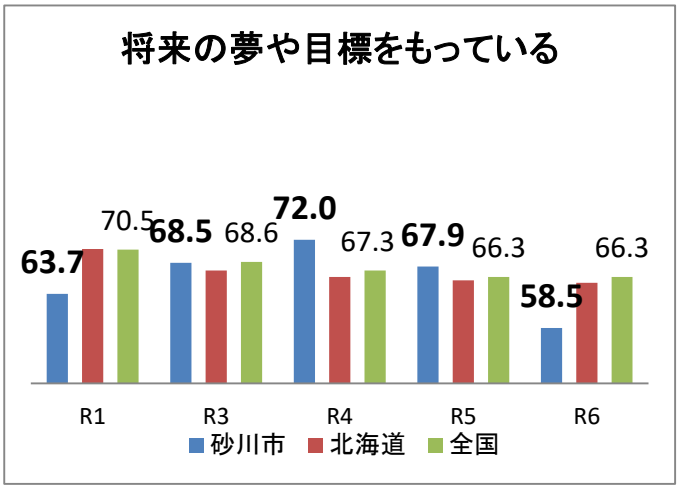
今後は、家庭学習の内容や計画のたて方などについて、児童一人ひとりに対して具体的に指導・支援をしていくことと合わせて、家庭における望ましい生活リズムの在り方について、保護者と認識を共有することが重要であると考える。

中学校質問紙調査（学校数： １校　生徒数：95名）

※北海道の結果については、グラフ表示のみとし、数値による表記を省略

１　自尊感情に関する生徒の状況

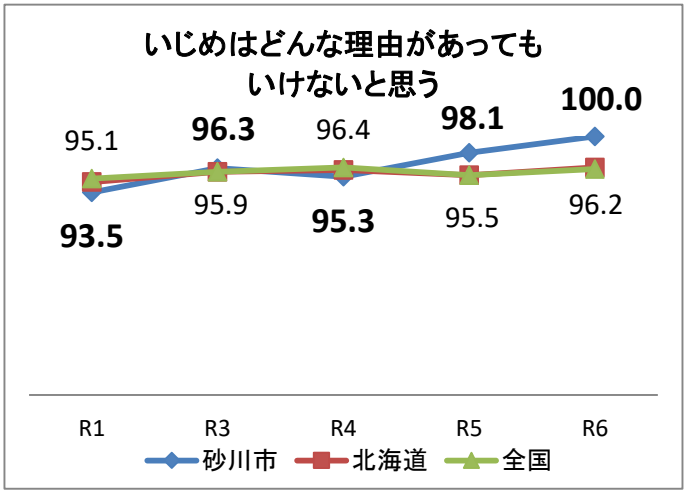


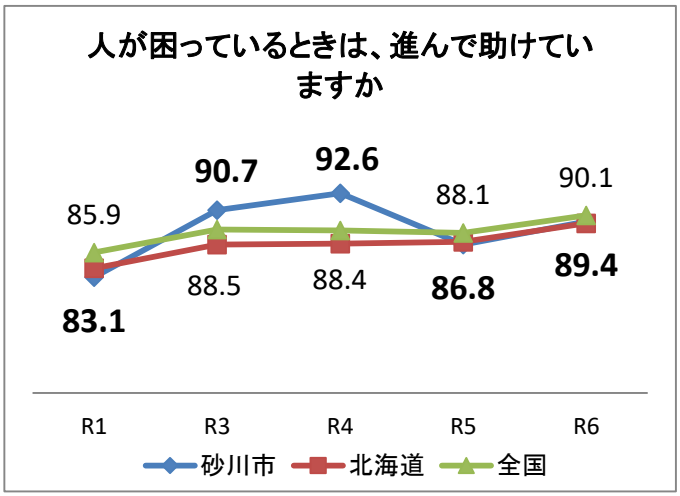


「自分にはよいところがある」と回答している生徒の割合は昨年度よりも上昇し、全国平均と同程度となった。このことは、学校や家庭、地域の中で生徒が自らの有能感や有用感を高めてきたことの証左と考えられる。引き続き、多様な他者との関わりや体験的な活動を通して、自らのよさを発見し、自信をもたせるような教育活動を充実させていくことが大切であると考える。

一方、「将来の夢や希望をもっている」と回答している生徒の割合は、昨年度よりも大きく低下し、全国平均を下回った。職場体験の充実や外部人材を活用した様々な学習活動の推進によって、生徒の職業観を育むことはもとより、自らの生き方について意識を向けていくことができるようなキャリア教育の一層の充実を図っていくことが大切である。

２　規範意識に関する生徒の状況

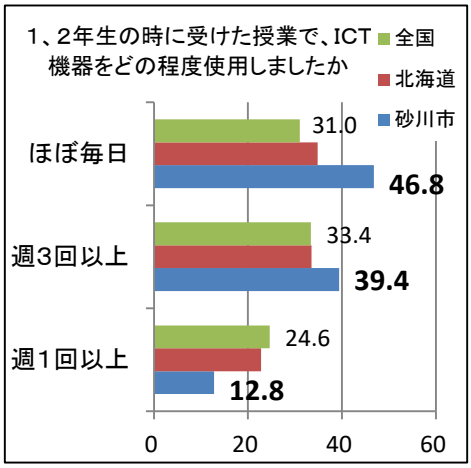


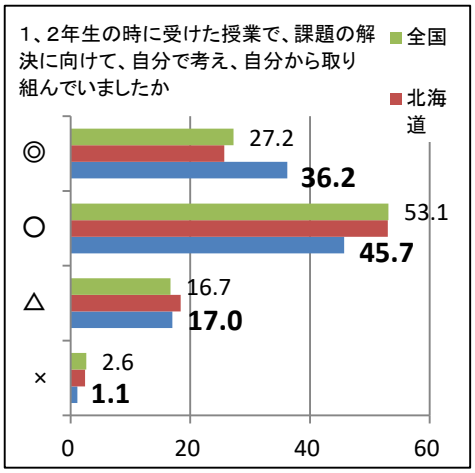


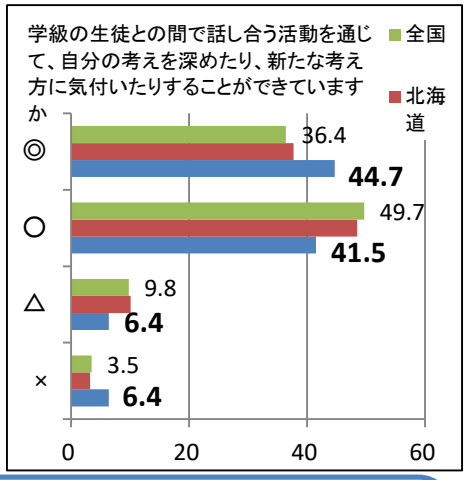
いじめに対する考え方は昨年度よりも上昇し、全国平均を上回った。また、困っている人を助けることの大切さを意識している生徒の割合も、全国平均をやや下回ったものの、昨年度よりも上昇した。他を思いやる温かな心をもっている生徒が多い点が本市の魅力であることを、生徒自身、保護者、地域住民と共有しながら、引き続き、いじめはどんな理由があっても許されない行為であることや、多様な他者を理解し合い、助け合い、支え合いながら生活を営むことのすばらしさに気付かせる指導を、様々な場面を通して積み重ねていくことが重要と考える。

３ 学習に関する生徒の状況

（1） ICT機器の活用と主体的、対話的で深い学びの実現

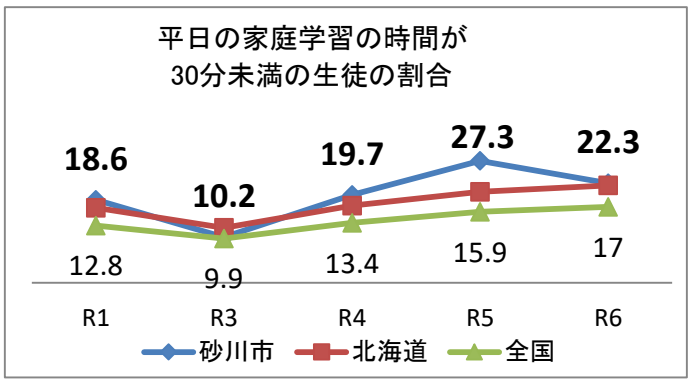


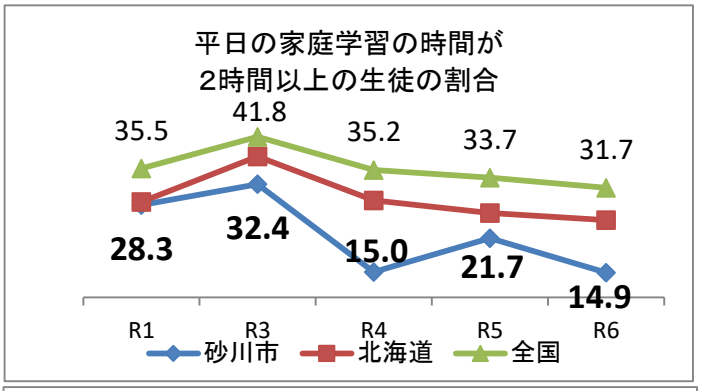


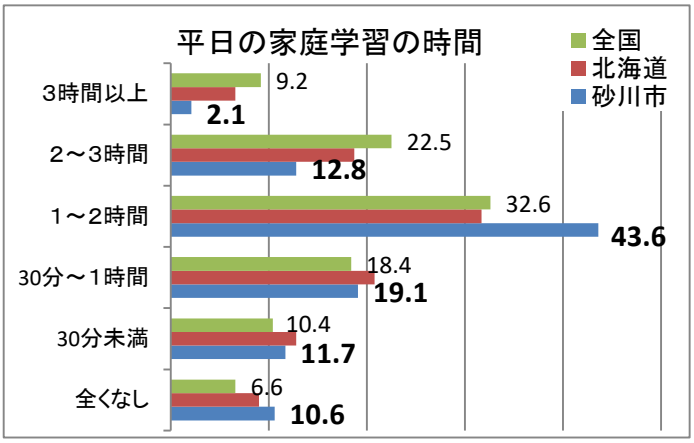


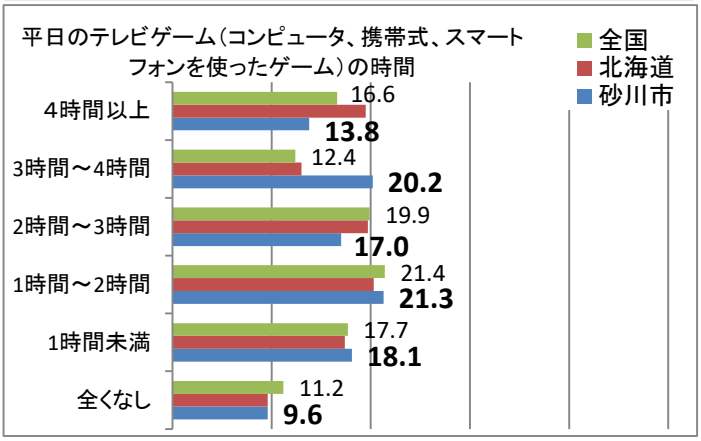
ICT機器を活用している割合は、全国平均を大きく上回っており、授業等においてデジタル機器の活用が進んでいることが分かる結果となっている。また、「主体的な学び」や「対話的な学び」に関わる質問に対する肯定的回答率も高く、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の取組が実を結んでいると考えられる。今後はさらに、授業での学習が家庭学習につながっていく「学びの往還」の実現に向けた全校的な取組が求められる。

（2） 家庭での学習状況









学習時間の質問からは、平日30分以下の学習時間の児童の割合が減少し、全国平均との差が縮まった一方、平日２時間以上学習している生徒の割合は昨年度よりも大幅に低下した。平日の家庭学習の時間別の数値では、１時間～２時間未満の割合が最も多く、家庭学習に充てる時間が十分にとることができない生徒が多いという傾向が見られる。

また、平日のテレビゲームの３時間以上の時間を見ると、５％全国平均を上回っており、ゲームに充てている時間がやや長い傾向が見られる。

全体としては、よりじっくりと家庭で学習に向き合う時間の確保が課題であり、保護者との連携のもと、家庭における生活習慣の見直しとあわせて、生徒自身に、学習内容の確実な定着が自らの進路実現はもとより、今後社会で生きていく上での重要な要素となることを継続的に指導することが大切である。